フランス史

160781136　木下雄介

第１章　フランス史とは何か

(a)フランス史

ヨーロッパ地域世界全体でのフランス

日本人にとってはフランス史が自己認識の手段

(b)フランス誕生の要因

５世紀後半にフランク人がフランク王国を建国

フランスはフランク王国に由来

(c)フランク王国

フランク王家は王国を家産視し、

分割相続の慣習のため、統一維持は短期間

→内乱でカロリング王朝の誕生

カロリング帝国は広大な領域を支配
→統治の機構が薄弱

(d)843年　ヴェルダン条約が締結
カロリング帝国を三分
王が落命のたびに国の再配分が実施
→国の配分の奪取を目論見、内乱が勃発

配分で、東フランク王国、西フランク王国、中フランク王国が誕生
この配分が現在のフランス・ドイツ・イタリアを形成

第２章　中世社会とカペー王国

(a)中世のヨーロッパ社会の大混乱から再建へ
　食料生産など経済生活の復興
　人々が安心の暮らしのための社会秩序の観念

(ア)フランスの秩序観念
　人間を３つの職分に区分し
　キリスト教と関連有
　1027年頃司教アダムベロンなどによって定式化

「神の家」では祈り、労働、戦いの三機能
「地上」では聖職者、農民、騎士が担当

(ィ)それぞれの役割
アダルベロンによると、王が三機能を統合し、普遍的な秩序を保証する存在
しかし実際は王、聖職者、騎士は農民に保護
農民には労働の奉仕を授与
→相互奉仕の関係

(b)カペーの奇跡

カペー朝の王権が12世紀頃から勢力拡大
→歴代の王が比較的長命
→個人的資質有
→全て男子後継者
これらが要因で生前中に後継者が決定

また、カペー家の本拠地が経済的に豊富
→都市から貨幣を調達するのが容易

(c)14世紀初め、カペー朝のフランス
フランスは第一級の地位を占有
文化的にも中心的な位置

第３章　中世後期の危機と王権

(a)ヨーロッパの中世後期の位置づけ
　中世中期は秩序形成、後期は危機の時代
　この危機の後、近代国家へ移行

(b)「危機」の時代
　飢餓、疫病の２つの災害
　14.15世紀にヨーロッパ全体に被害

(ア)飢餓

(i)ヨーロッパで慢性的な飢餓

→11世紀の人口増加

→耕地の拡大や技術改良が頭打ち

→ヨーロッパ全体で人口過剰

(ii)農民は閉鎖的な自給経済へ

経済全体が沈滞

(イ)疫病

(i)ヨーロッパ全体にペスト菌が蔓延

1347年末ペスト菌は中東からマルセイユに上陸

ペスト菌は2年のうちに蔓延

→栄養不良のためヨーロッパは抵抗力が脆弱

(ii)ペスト菌の猛威

一世紀後半のうち、住民の30~50%が死亡

(ウ)戦争

「百年戦争」が特に被害が甚大

カペー朝はフィリップ4世が死亡後、おおお

百年戦争はフランスを舞台に王位継承の競争

第４章　結論

フランスの社会と国家の歩みは人類に大きなメッセージ

→今後に期待